
IS 転生者なのか？

めれむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 転生者なのか？

【Nコード】

N7948Z

【作者名】

めれむ

【あらすじ】

暗闇の世界を通過してISの世界へとたどり着く
インフィニット・ストラトス

初投稿の何番煎じになるか分からないIS二次創作です。

原作崩壊、キャラ崩壊、他作品の要素を含みます。

苦手な方は読まない事を推奨します。

プロローグ（前書き）

初投稿作品故にいろいろ拙い点もあるでしょうが宜しく願ひします。

プロローグ

。。
ここは、何処なのだろうか。

何も聞こえず、見渡す限り真っ暗闇な空間が広がっている。

浮いているのか、沈んでいるのか。進んでいるのか戻っているのかもわからない。

急に何かもやの様なモノが自分の中に入って来る。

普通は体内に異物が入ると不快感を感じるのだが、これには不快感を感じなかった。

やる事もないのでそのもやの様なモノを真剣に受け容れる事にした。

。

受け容れ始めてどれだけの時間が経過しただろうか。

もつとも、視界に変化はなく音も聞こえない空間で時間の判別など出来るわけがないのだが。

もやを受け容れている途中に、生まれてからずっと感じる事のなかった感覚に襲われる。

例えるならそれは生きるか死ぬかの瀬戸際にいるようなものだろうか。経験してない以上ろくな例えにならないが。

恐らく戦慄という言葉がしっくり来るだろう。

受け容れ終わると戦慄は消え失せてしまった。結局、あのもやは何だったのだろうか。

そう考えていると急に視界に光が入る。

暗所、それも光のない空間になれきってしまった目に光をあてると非常に痛い。明順応なんてレベルの話ではない。

文句を言ってやろうと口を開ける。しかし、それは言葉らしい言葉を発せず、産まれたての赤子がするような泣き声を上げただけで終わってしまう。

わけもわからずパニック状態になってしまう。

そんな中、いきなり抱き上げられパニックが加速。

少しやつれているとはいえかなりの美人がベッドにいた。

「この子が…私達の子ね…」

…この黒髪美人が僕の母親だろうか。何故だろう、すぐにそう理解してしまった。

ベッドの横には優しそうな好青年がいる。この人が父親なら少なくとも両親には恵まれたと言えるよう。

「よく頑張ったな、俺達の子供はお前に似て綺麗になるぞお〜」

「あら、この子は貴方に似てとっても優しい子になってくれるわよ
お〜」

「あははははは！（うふふふふふ！）」

…良い両親なんだけど重度の親バカもといバカ親なようです。

人は見た目で判断するな、とはよく言ったものだねえ。

「シラー、この子の名前どうしようか？」

僕の母はシラーと言うそうです。

お願いですからいわゆるDONネームはやめて下さいね？

「ニール、慣習に従って真名はシオンはどうかしら？」

僕の父はニールと言うs…僕はアトラスの錬金術師とは違うぞ。

うん？慣習？真名って？

「シオン…ああ、真名は頭文字がSから始めるってヤツか。ならこの子の名前はセツナ・アナスタシア、そのまま真名はシオンでどうだ？」

「セツナ…いい名前ね、何か由来とかあるの？」

「歴史から見て一瞬にも満たない人生を幸せに生きてほしいから、かな（昔の仲間の名前ですだなんて言えるわけねえだろ…）」

…父さん。僕には普通に聞こえてるんですが。

「ぶつちやけると男女問わずこの名前はしっくりくるからだな」

父さん！！？

「流石ニールね！そこまで考えてたなんて！」

母さん！！？

駄目だこの両親、まともじゃない…ッ！

「見てニール、シオンが喜んでるわ！」

「いい名前を付けてもらえたからだろう」

∴ まあDQNネームじゃないから良しとしますか。

そんなこんなでアナスタシア家の一員になりました。

プロローグ（後書き）

気付いた方いますよね？

父は緑がパーソナルカラーのあの人は？

1・(前書き)

この作品はゆっくり更新する予定です。

長期休暇と重なった場合更新頻度を上げます。

これ、大丈夫かな？

引っ掛かるかな？とバクバクしております。

皆さんおはようございます。

もしくはこんにちは。

それともこんばんわが正しいでしょうか？

セツナ・アナスタシアです。

時間がたつのは早いもので、五歳の誕生日を迎えました。

あれから今までの出来事を簡単にまとめると、

・気が付いたらもう歩けるようになっていた

・文字が読めるようになってすぐに研究職の両親の蔵書を読んで理解する

・両親の研究に意見するようになる

・お絵描きで思い付いた事を書いて両親を驚かせる

僕絡みの主な出来事はそのくらいでしょうか。

「むにゃ…おにいちゃん…」

大切な事を忘れていました。

僕に兄弟ができました。

妹のクリステイナとフェルト、弟のリヒテンダールです。

クリステイナは面倒見が良くて、両親だけでなく僕もとても助かっています。

フェルトは人見知りが激しいです。いつも僕かクリステイナの後ろにいます。

リヒテンダールは…まあ、元気いっぱい困ってます。

良い兄になれているといいんだけど…

あと最近、悩みは他にも一つありまして。

がちゃ、ばたん。

この時間帯になるといつもある部屋が騒がしいんです。

おかげで夜も眠れませんし、クリステイナ達を宥めるのに苦労します。

そろそろ苦情でも出すべきですかね？

あ、この部屋が問題の部屋です。両親の寝室ですけど。

がちゃ

「ああっ！来てっ、ニールう！！」

「うおおおおお、狙い撃つぜエえ！」

そこには、素っ裸の両親が取っ組み合いをしているじゃありませんか。

またプロレスごっこですか…。

…プロレスごっこですよ？

ええ、誰が何と言おうとプロレスごっこです。

異論は認めません。

『父さん、母さん。うるさくて全然眠れないんだけど』

「セツナ！？お前いつからそこに！？」

父は今お気づきのようです。

『今来たばかりだけど？』

で、プロレスごっこは何ラウンドしたの？』

「え？だいたい3ラウンドかなー」

…。今寝ろ、すぐ寝ろ！

アンタ達のおかげで安心して眠れないんだからさ！

『父さん、母さん。いつ寝るの？』

「母さん！父さんはもう眠いからプロレスはここまでにしな
い！？」

「え？ええ、そうね！母さんとっても眠いわ！セツナも早く寝るの
よ！？」

ぼふっ 布団に潜る音

…茶番は見飽きたよ、とか言うべきかな。

騒音問題も解決したし、僕も早く寝なくちゃ。

ばたん。

セツナ Side out

Side ニール

…セツナの奴、ありや絶対気付いてたな。

アイツは他の子供達と比べると行動も思考も全然ガキっぽくないし。なのに子供達に慕われているのはセツナの人徳の為せる技、というわけか。

だが、あの子の頭脳は早熟とは程遠い。

落書きで光学迷彩の数式やこの世界には存在しないはずの強化カーボンの化学式を書くあたり、異常だと言ってもいい。

今は誰にも気付かれてはいないが、もしその手の人間がセツナに興味を持ったら？

これからセツナが興味を持つ物が世界を揺るがせる程のものだったら？

…いずれにせよ命を狙われるようになる。

あの時のように家族を失う羽目になるのは御免だ。

今のうちに出来る事から始めていかねえとな…

「シラー、俺達がセツナ達をしっかりと守っていつ」

「くーっ、くーっ」

…まさか、まだ寝たふりを続けてるのか？

「おい、シラー？」

「くーっ、くーっ」

…あー、とにかく今からでも出来る仕込みは済ませておくか。

部屋の隅に置いてある箱が緑色につつすらと輝いた気がした。

ニール Side out

1・(後書き)

そろそろ登場人物紹介とかすべきですかね？

意見、感想、誤字脱字報告待ってます。

2・(前書き)

動きの描写がまともに来ないヤツがISS二次創作書いてていいの
かねえと思うようになりました。

本編入るまでに頑張らないと…

まだ原作キャラは出さない(迫真)

Side セツナ

どうも、セツナです。

今、僕は猛烈に困っています。

「よーしセツナあ！縄脱けの次はサバイバル技術だあ！カレーくらい、作ってみせろあ！」

主に父さんのせいで。

そもそも、父さんはこんなに熱血漢だっけ？

こんな事になるまでの経緯を解説すると、

回想開始

朝起きてまずするのは妹たちを起こす事。

いつものようにクリステイナから起こしていく。

『クリス、起きて起きて』

ゆさゆさ

「んにゆ…おにいちゃ、クリスのおよめさん…」

モゾモゾ

…何が起きてるかわからないけど夢の中の僕、頑張つて！強く生きて！

このままじゃ平行線のままだなあ…いつも通りにやりますか。

そう思った僕はクリステイナの耳元に口を近付けて囁く。

『ねえクリス？お兄ちゃん今から出かけるんだけど、早く起きないと置いて行っちゃうよ？』

「おはようございますっ！！」

がばあっ！

『ん、おはよ』

「私、フェルト達を起こして来ますッ！／／／」

『うん、わかったよ』

とは言っても向かいのベッドなんだけどなあ…

と思ったのも束の間、後ろからいきなり黒い麻袋を僕の頭に被せられてしまう。

即座に腕を縛られ抵抗できないまま持ち上げられ、何処かへと連れて行かれる僕。

私のお嫁さんが変な人に誘拐されたと泣き叫ぶクリスティナ。

…クリス、まだ寝てるのかい？

。

持ち運ばれてしばらく経ち、いきなり投げられてしまった。

よくわからないまま鼻から着地。すっごい痛い。

手足と視界がフリーになったらこんな事した相手に、近所に住む顔色の悪いお兄さんから教わった“ハイパー銀色の脚スペシャル”をたたき込もうと思うんだ。

がさっ。

勢い良く頭の麻袋を引き剥がされる。視界が開けた事で僕は草原に
いるという事はわかった。

そして犯人の顔を見る。

そこには芋虫のように転がっている僕を見下ろすように父さんが立
っていた。

空気が凍り付く。

この男は仕事放り出して何やっているんだ。

「これからセツナをそこらのエージェントよりも強くさせる！名付けて、セツナ強化大作戦ッ！！」

…！？

回想終了

で今に至る、と。

あーあ、どう縛ったのか手首と足をぐるぐる巻きに縛った縄もほどけないし…

「ほらほらサバイバルに移行しないと昼御飯はもらえないぞー？」

嘘…でしょ…！？

『ねえ父さん！何で僕がこんな事しなきゃいけないのさ！？』

「早いうちからやっておいて損はないし、それがお前の身を守る事に繋がる！」
イラッ

しょうがない…こんなこともあろうかと、耳の裏に隠しておいた小型ナイフで手足の縄を切る。

さて、手足及び視界がフリーになったので。

父さん（目標）から一度距離を置いて助走、そして飛び上がる。

『ハイツパー、銀色の脚イイイ！！スぺっシャアウルツ！！』

どかつ

「へぶっ！」

叫びながら蹴りつけた後しっかりと着地。

とにかく父をぶっ飛ばす事には成功した。

別に怪我させたいとかじゃなくて、一発殴らなきゃ気が済まなかっただけなんだ。蹴りだけど。

そつえばこれは家庭内暴力になるのかな？家の中じゃないから当てはまらないよね！

「いてて…この調子なら計画からいろいろ省いて良さそつだなあ」

『父さん？帰ったらクリスマスに謝ってね？』

「俺は…嫌だね」

『父さん？帰ったらクリスマスにあやまつてね？』
『ゴゴゴゴ』

「…はい」

その後、一緒に野外炊飯してカレーライスを堪能した。

結局、何がやりたかったのかはわからなかったままだけど、今度はみんなで野外炊飯したいと思った。

余談だけど、父さんは何も言わずに家を出て来たからか、帰ったらうちの女性陣が父さんを睨み続けていた。

母さんはフライパンを投げ、クリスは辞典のカドで殴り、フェルトはいかにも怒ってます！な視線を向けていた。

そして僕は被害者だからお咎めなし、との事。

セツナ Side out

Side ニール

今日はかなりの収穫だった気がする。もっとも、対価は大きかったが…

ふざけた叫びを除けばあの蹴りは相手の意識を簡単に奪っていく危険な技だ。

あんなもん誰に教わったんだ？

普通はあんな技、善悪の区別もつかないようなガキに教えるなんてまともじゃねえ！

まあいろんな銃の扱い方を教える予定の俺が言えた事じゃないが…とにかく、誰か大切な人に危険が迫った時にだけ“叫ばずに”使うように念を押しておかないとな。

あの技は奇襲に向いている。…ただ、叫びをなくせばの話だが。

「ちよつとニール！聞いてるの！？」

「…はい」

明日は伝えてから行こう。
もうあんな心身ともに痛い思いはしたくない。

フェルトの視線は強すぎだ。それも涙目と上目遣いだなんて思い出すだけでもう…じぶっ

ニール Side out

2・(後書き)

恋姫から持ってきた真名設定ですがセツナ本人は偽名に使えればい
いかなと考えてます。

いずれ偽名として使う予定です。

いつになったら本編に…

意見感想、誤字脱字等の報告ありましたらお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7948z/>

IS 転生者なのか？

2011年12月27日00時51分発行